

Title	『源氏物語』と中世王朝物語の距離 : 「わららか」・「寝くたれ」の表現史
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	詞林. 2010, 48, p. 18-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67619
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『源氏物語』と中世王朝物語の距離

——「わららか」・「寝くたれ」の表現史——

藤井 由紀子

はじめに

鎌倉・室町期に作られた物語群（以下、総称として「中世王朝物語」を用いる）が、圧倒的な『源氏物語』の影響下にゐることは、既に、さまざまな角度から論じられてきた。個々の作品についても、細部に至るまで、『源氏物語』からの模倣・引用箇所が指摘されており、中世王朝物語研究にとつて、『源氏物語』との関連性を論じることが、すべての前提に位置する基本的な作業であると言つてよいだろう。

しかしながら、中世王朝物語のすべてが、『源氏物語』の達成を正しく継承するものとしてあつたかと言へば、そこには疑問が差し挟まれる。旧稿で指摘した通り、『源氏物語』と中世王朝物語の間には、「隔絶」と呼んでよいほどの、大きな溝があることもたしかなのであり、むしろ、その相違点にこそ、中世王朝物語の本質が示されていると考える。

本稿では、その相違点をより明らかかなものとするために、『源氏物語』と中世王朝物語に共通して使われることばに注

目し、それが実質的に何を意味するものであるのか、その表現の位相の違いを考察する。誰が、何のために書いたのか、その存在意義すらよくわからない中世王朝物語を、『源氏物語』からの距離をはかつて表現史の上に位置づけることにより、その指向するところが、多少なりとも明らかになるのではないかと考えるからである。

具体的には、「わららか」・「寝くたれ」という、女性美を表すことばを取り上げ、中世王朝物語の描く女君のあり方を、『源氏物語』との比較の上で探っていくこととする。

一 「わららか」な女君

「わららか」¹は、『源氏物語』以前の用例がなく、「紫式部の造語性が強い」²ことが指摘されていることばである。『源氏物語』に見られる用例をすべて挙げる。

A人さまのわららかに、け近くものしたまへば、いたくまめだち、心したまへど、なほをかくしく愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。

（蜩 一八八頁）

B 酸漿などいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれる隙々うつくしうおぼゆ。まみのあまりわららかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。その外はつゆ難つくべうもあらず。
(野分 二七〇頁)

C 女は、わららかににぎははしくもてなしたまふ本性ももて隠して、いといたう思ひ結ほほれ、心もてあらぬさまはしるきことなれど、……
(真木柱 三四五頁)

D 大将の、をかしやかにわららかなる気もなき人にそひゐたらむに、はかなき戯れ言もつましうあいなく思されて、念じたまふを、……
(真木柱 三八二頁)

E 父大臣は、琴の縮もいと緩に張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。これは、いとわららかに上る音の、なつかしく愛敬づきたるを、いとかうしもは聞こえざりしを、と親王たちも驚きたまふ。
(若菜上 五三頁)

全五例中四例(A~D)が玉鬘十帖に集中しており、うち三例(A~C)が玉鬘の性格・容貌を語るために使われていることから、『源氏物語』内においても、かなり偏った使用傾向のあることばであることが理解できよう。それは、「これまでの六条院の女君では担いきれない物語を背負うべく登場させられた」玉鬘という新ヒロインの、他の女君とは異なる人物造型に深く寄与するために生み出されたことばであると言つてよく、その人柄や容姿が、「はなやかで親しみやす

く人を引きつけずにはおかない魅力を持ち、同時に、高貴さ、上品さにはやや欠ける」ものであることを、端的に表すことばとして定義できるものである。

玉鬘の人となりを象徴して印象的な、この「わららか」ということばは、中世王朝物語においても、いくつかの用例を拾うことができるものである。今、そのすべてを挙げておく。

①もてなしありさまはればれしくならひ給ひにしかば、いとあえかに埋もれ、いぶせくはなく、わららかにをかしく、いと馴れたる心つきて、ものを思ひ嘆きても、ひとへに思ひ沈みてはあらず、泣くべき折はうち泣き、をかしく言ひたはぶるる折はうち笑ひ、いはん方なく憎からず愛敬づき給へる人の、……
(「とりかへばや」巻三 一八四頁)

②いとよき程に、つぶつぶと肥えたる人の、いとささやかにて、額髪いみじくをかしげにかかりて、まみのほどわららかにさみみて、口つき愛敬づき、いと見まほしきさまぞし給へる。
(「在明の別」巻一 三八二頁)

③うちあかみ給へる御顔の匂ひ、愛敬、まみのわららかに、細く見えたる程もいと憎からず、思ふやう、額つきなどぞ、ものの本たにくうや、うつくしきことと言ひつべき。
(「いほでしのぶ」巻一 一九八頁)

④手つき、腕などをかしげに、御顔もまみわらかに愛敬づきて、髪懸かりはらはらと涼しげにて、そびやかに

見えたる肩つき姿やうも、すべてをかしげに、丈にゆるるかにあまり給へる髪の裾そぎめはなやかにて、うつくしき人と見え給へり。〔風につれなき〕下 一八一頁

⑤御継子の君だちにも、我が御齡のほどにや、憚り給はず。三十七八にて、わららかに愛敬づき、はなばなともてはやし、御簾の内にも入れ奉り給ふ。

〔海人の刈藻〕卷二 一九〇頁

⑥御顔ふくらかに愛敬づき、目見のわたりなどわららかなるさまぞし給へる。なよらかにらうたきさまには見え給はず。〔若の衣〕春 二二三頁

これらの用例を並べ見るとき、異なる作品の異なる状況を描くものでありながらも、表現上、共通する要素を確認することができることに気づく。それは、「わららか」とともに「愛敬づく」ということばが使われている点、「わららか」さが「まみ」の辺りに現れているという特徴が描かれる点などであるが、そのいずれもが、先に見た『源氏物語』A・Bに既に見出すことができるものであることから、中世王朝物語における「わららか」は、『源氏物語』の表現を源泉とするものであると、ひとまずは認めることができそうである。

しかしながら、これらの用例が、等しく『源氏物語』の直接的な影響下にあるかという点、必ずしもそうとは言いきれない。ここには、『源氏物語』からの小さくはないズレも確認できるからである。

①⑥は、すべて、女君の性格・容貌を表すために「わららか」を用いたものであり、男君に対するものは一例もない。具体的な人物名を挙げておくならば、①は女大將、②は中務の宮の御方（右大臣の中の君）、③は宮の君（故帥の宮の姫君）、④は内大臣の大君、⑤は按察の上（按察大納言の三人目の北の方）、⑥は式部卿宮の姫君（東院の上の養女）を、それぞれ描写したものである。このうち、①『とりかへばや』の女大將を除くと、②⑥の女君は、物語世界において、ヒロインとは到底呼ぶことのできない、端役的な登場人物なのである。のみならず、その人物造型において、マイナスの側面がかなり強い女君も複数指摘できる。

たとえば、②『在明の別』の中務の宮の御方は、人妻でありながら三位の中將を通過せ、②の場面では、「四十路にも三四ばかり余り給へる」(三八〇頁)という年齢にも関わらず、左大臣と契り結び、挙げ句、最後にはものけとなる女君である。③『いはでしのぶ』の宮の君もまた、大將・二位の中將という二人の男君と契り、自ら進んで大將の妻である一品の宮に仕え、後には、白河院から寵愛を受ける女君であるが、その性格は、「埋もれ果てにし古宮腹の御様には違ひ給ひつればこそ」(二九五頁)・「おもなき御心」(二九六頁)などと語られ、奥ゆかしさに欠ける女性として描写されている。

⑤『海人の刈藻』の按察の上は、決して人柄が悪いわけではないものの、理想的であった先の北の方に比べ、「少し腹立

たしく、高やかにものうち言ひたる」(九〇頁)ところが欠点として挙げられ、連れ子である姫君と、継子の宰相の中將の仲が露見した際には、取次をした侍従を「引きかなぐり、打ち張りなど」(巻三 一三三頁)するという粗暴な一面を見せたりもする。

このような女君たちの人物像が、「わららか」な女君の起源である玉鬘の人物像と大きく異なるものであることは言うまでもない。もちろん、①⑥に見られる「わららか」は、そのことは自体にマイナスのイメージがあるわけではなく、すべて、女君の美点として語られている。むしろ、あまりに「わららか」であることが「いとしも品高く見えざりける」という評価に繋がる『源氏物語』のほうで、「わららか」ということはそのものの価値は低いようにも思われるのだが、今、重視したいのは、「わららか」ということを指標として付される女君の内実の変化である。中世王朝物語は、ヒロイン玉鬘の符牒としてあった「わららか」を、明らかに、異なる性質を表す女君の符牒として用いているのである。この変容は、何を意味しているのだろうか。

結論を急ぐ前に、「わららか」の表現史をもうしばらく辿り見ておきたい。まず、『狭衣物語』から。

・太政大臣の御方は、なかのこのかみにて、もとかしはにおはすれど、かかるあつかひぐさも持ちたまはねばにや、我が御有様ひとつを、はなやかに今めかしうもてないた

まひて、我はと誇りかにおし立ちたる御心掟てにぞおはしける。人よりはいかでと、もて出でたる御物好みなどして、いとわららかに、人にくからぬ御心掟てなるべし。

(巻一 五四頁)

・幼なくより、いづれの御方にも隔てなう、殿のならばしきこえたまへれば、女房なども見えたてまつらぬはなきなかに、この御方はみづからもわららかに愛敬づきたまへる御心ざまにて、わざと隔てたてまつりたまふこともなかりけり。

(巻三 二八頁)

『狭衣物語』において、特徴的に「わららか」が用いられる人物は、洞院の上である。洞院の上が、玉鬘のようなヒロイン的人物ではないことは周知の通りである。独断的に今姫君を迎え取り、後には入内させようとまでし、姫君本人や母代の資質の悪さと相俟って、物語内唯一と言ってよい烏澁的な事件を引き起こす原因を作る人物である。その洞院の上の本質的な性格を描くくだりに、二度も「わららか」が使われていることは、注目に値する。

実際、先に見た⑤の『海人の刈藻』の按察の上の人物造型は、この洞院の上の人物造型を模倣したものと考えられるし、⑥の『苔の衣』の姫君は養われる側ではあるが、その養母・東院の上の人物的機能が、洞院の上と重なり合うものであるため、派生的に姫君に「わららか」が使用されたと考えることもできそうである。

このような直接的な模倣箇所が指摘できることを鑑みれば、『狭衣物語』の「わららか」が、中世王朝物語に対して、大きな影響力を持つものであることは疑いない。『狭衣物語』によって、中世王朝物語の「わららか」は強く定義されているのであって、そこに、『源氏物語』から始まる「わららか」の表現史の、大きな屈折点を認めることができるのである。

ただし、ここで考えておきたいのは、『源氏物語』を深く理解している『狭衣物語』が、なぜ、玉鬘とは位置づけの異なる洞院の上に「わららか」を付着させたのかという点である。『夜の寢覚』の用例も見ておきたい。

「かたち、有様こそ、いとめづらかなるまで見えはべる人なれ」とて、をりをりの有様、くはしく語り申させたまふに、いとゆかしさまさらせたまひて、親と申しながらも、ものにと気高く、もの遠くはおはしまさず、いとけ近う、わららかにのみおはしますに、すこしうちつけて、「夕さり渡り参りたまひつらむに、見たまへはべらばや。(中略)いかで、名高うきこえはべるけはひ、有様ばかり、見たまへまほしけれ」と、せちにおほしめいたる気色にて申させたまへば、……(卷三 二四九頁)

『夜の寢覚』の現存部には、「わららか」の用例は多くは見出せないが、右の用例は、女性の資質を表すという点において、表現の上でも『源氏物語』と通底し、看過できないものであると考えられる。

ここで、「わららか」な女君として描かれているのは、大皇の宮である。大皇の宮は、娘婿である内大臣が寢覚の上に惹かれるのを許すことができない。策謀を巡らせ、帝をそのかして寢覚の上に接近させる、いわばヒロインの敵役としてある人物である。今挙げたくだりは、帝が寢覚の上への興味を大皇の宮に打ち明ける場面であり、後の闖入事件の発端ともなる箇所なのだが、ここで注意したいのは、帝が大皇の宮に本心を吐露したのは、他でもない、大皇の宮が「わららか」な性格であることに気を許したからだと言われている点である。大皇の宮に付着する「わららか」な性質は、後の物語展開までも導く、根幹的なものであることが確認できる。

さて、このような大皇の宮の人物像は、先に見た『狭衣物語』の洞院の上と共通するものがある。両者とも、子の親としてあり、子を思うがゆえにその行為が過度となり、不穏な事件の火種を作ることとなる。『狭衣物語』・『夜の寢覚』が「わららか」を付着させたのは、盲目的・直情的な母としての女君であったということになるのだが、あるいは、ここに、竹河卷の玉鬘の姿が透けて見えはしないだろうか。成熟した彼女もまた、子のために奔走し、失敗し、後悔する女君としてあったのだった――。

もちろん、竹河卷の直接の影響は、具体的な箇所が挙げられない以上、不明というしかないが、実際のところ、玉鬘の「わららか」な性格は、真木柱巻でも「にぎははしくもてな

したまふ本性」と述べられる通り、洞院の上の「我はと誇りかにおし立ちたる御心掟て」と紙一重のものである。玉鬘のその性質は、「いたくまめだち、心したま」うという自制心、また、絶対的支配者である光源氏の監視下にあるという状況によって、美質の範囲で抑えられていたのであるが、洞院の上・大皇の宮の場合、その重い地位ゆえに、抑制されるところがない。両者の違いとは、「わららか」な性格に起因する心情がそのまま発現する度合いの差、さらに、それが能動的な行為と結びつくかどうかの差でしかないのである。洞院の上・大皇の宮は、もう一人の玉鬘であり、竹河巻の玉鬘とパラルルな存在にあるといつてよい。

『狭衣物語』・『夜の寝覚』は、『源氏物語』の創造した「わららか」な女君の本質を正しく理解した上で、それを変容させるというよりは、むしろ、拡大・伸張させ、女君の行動原理を支える重要な要素のひとつとして確立させている。ここに、『源氏物語』を継承しつつも、それを超克していこうとする、平安後期物語の達成を見ることができらるう。

そして、このような、「わららか」という生来の気質のままに行動する女君の姿こそが、中世王朝物語の多くが引き継いだものであったと理解できるのである。『とりかへばや』の用例をもう一度引きたい。

もてなしありさまははれはれしくならひ給ひにしかは、いとあえかに埋もれ、いぶせくはなく、わららかにをかし

く、いと馴れたる心つきて、ものを思ひ嘆きても、ひとへに思ひ沈みてはあらず、泣くべき折はうち泣き、をかしく言ひたはぶるる折はうち笑ひ、いはん方なく憎からず愛敬づき給へる人の、……
(巻三 一八四頁)

ここで述べられる女大将の性格は、中世王朝物語に描かれた「わららか」な女君の性質をよく表しているよう。「泣くべき折はうち泣き、をかしく言ひたはぶるる折はうち笑ひ」という、「わららか」な女君の直情的な姿は、先に見た『在明の別』・『いはでしのぶ』・『海人の刈藻』の女君たちの性質とも通底するものである。

と同時に、ここで見逃してはならないのは、女大将の「わららか」さが、「もてなしありさまははれはれしく」過ごしていた、男君としての生活によって獲得されたものであったという叙述である。たしかに、そもそも行動的であったがゆえに男装することとなった女大将には、「わららか」な性質が先天的に備わっていたと考えられる。しかし、それは、男君として自由な行動が許されるからこそ最大限に発露するものであったのである。ここに、中世王朝物語における「わららか」が、行動力と直接結びつく性質であることが、逆説的ではあるものの、如実に表されていると言えるだろう。

今、この『とりかへばや』の女大将が、中世王朝物語の「わららか」な女君の中にあつて、唯一例外的な主役であつたことを思い出さなければならぬ。中世王朝物語における「わ

ららか」なヒロインは、トランス・ジェンダーという特異な設定の中でしか実現しなかったのである。「わららか」な女君は、あくまで端役としてしか行動を許されない。言い換えるならば、中世王朝物語は、物語を動かす力として「わららか」な女君を必要としながらも、その性質を、ヒロインには希求しなかったということになる。『源氏物語』の創造した「わららか」なヒロインは、その性質を肥大化させて下方へと移動し、新たな役割をもって、中世王朝物語の中に再生されているのであった。

二 「寝くたれ」の姿

前節において、中世王朝物語における「わららか」の使用例を辿り見て、それが、ヒロインには使われないことを確認した。本節では、逆に、ヒロインのみに付着することばに注目し、中世王朝物語の描く女性像が、何を指すものであるのかを考察していくこととする。

取り上げるのは、「寝くたれ」ということばである。今、中世王朝物語から、いくつかの用例を挙げてみる。

⑦夜も明け、日もいづる程に、姫君を見奉り給ひければ、嵯峨野にて見しよりも盛りと見えて、寝くたれ髪のおほめきて、なつかしき、言ふもおろかなり。

〔住吉物語〕下 三三八頁

⑧漸く明けもてゆく空のいとをかしげなるを、格子を少し

上げて、もろともに御覽す。(中略)袖覆ひし給ふかはら目、寝くたれの御かたち、いと見どころ多かり。

〔夢の通ひ路物語〕巻五 一八九頁

⑨寝くたれの髪のはろほるとこぼれかかりたるに、明け方の月さし入りて、光も異に、あなめでたと見ゆる面付きぞいとど御身に染み返り、せん方なくていでおはします。

〔木幡の時雨〕三八頁

⑩からうして御直衣などひき繕ひて出で給ふを、女も見奉り送らんとてにや、几帳の帷子少しおしやりて、とばかりゐざり出で給ふ御寝くたれの、はらはらと紛ふ筋なくこぼれ懸かれる御宿直姿のしどけなげなるに、菊がさねの萎えたるに、御裳ばかりさすがにひき懸け給へる御もてなし、ねびれたる御顔つきしも、まして匂ひやかにめでたきを、……

〔しら露〕上 一八八頁

⑦は住吉姫君、⑧は京極三の君、⑨は木幡姫君、⑩は白露姫君の姿をそれぞれ描くものである。いずれも、物語の中心的人物であり、ヒロインと呼ぶる女君である。と同時に、⑦⑩の用例は、逢瀬の翌朝の女君の姿を描いたものであるという点においても共通している。男君の目に映るその姿は、⑦「言ふもおろかなり」、⑨「あなめでた」などの最上級の賛嘆の表現に表れている通り、非常に美しい。

たとえば、『枕草子』に、朝早くやってきた道隆に「寝くたれの朝顔」を見られまいと「引き入る」女房たちの姿が描

かかっている(二六三段 一二八頁)ように、そもそも、「寝くたれ」の姿は、起きたままの見苦しいものであって、人に見られてよいものではなかった。そのような纏わない姿であつてさえ美しいという叙述は、「寝くたれ」の女君の類い希なる美質を強調するものであると言えよう。中世王朝物語の「寝くたれ」は、ヒロインの本質的・先天的な美を端的に示すことばとしてあると、ひとまずは定義しておきたい。

さて、このような美しさを表す「寝くたれ」の表現の始源を尋ねると、やはりそれは『源氏物語』にあることに気づかされる。

F 酔にかこちて苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人々聞こえわづらふを、大臣、「したり顔なる朝寝かな」ととがめたまふ。されど明かしはてでぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔見るかひありかし。

(藤裏葉 四三三頁)

G いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ちうけて、女君、さばかりならむと心得たまへれど、おぼめかしくもてなしておはす。

(若菜上 七七頁)

H 寝くたれの御容貌いとめでたく見どころありて、入りたまへるに、臥したるもうたてであれば、すこし起き上りておはするに、……

(宿木 三九六頁)

Fは夕霧、Gは光源氏、Hは匂宮の姿を描くものである。『源氏物語』における「寝くたれ」は、この三例のみであるが、

F「見るかひありかし」、H「いとめでたく見どころありて」などの表現を確認するまでもなく、光源氏・夕霧・匂宮という、絶対的な美を有する血族にしかそれが用いられていないという点で、その美しさを象徴する機能は保証されていると言つてよい。さらに、先に見た中世王朝物語の例との共通点を指摘するならば、この三例は、いずれも、逢瀬の翌朝の「寝くたれ」の姿を描くものなのである。Fは雲居雁との、Gは朧月夜との、Hは六の君との逢瀬の場面につづく箇所に見出すことのできるものである。

このように見てくれば、『源氏物語』と中世王朝物語の距離は、非常に近いように思われるのだが、しかし、両者に大きな違いがあることは、既に明らかであろう。『源氏物語』の「寝くたれ」は、すべて男君の姿としてあつて、そこに、ヒロインたる女君の「寝くたれ」の姿は、一例も見出せないのである。

既に指摘がある通り、『源氏物語』以前の散文作品に、「寝くたれ」の用例はほとんど見出すことができない。もともと、「寝くたれ髪」という形で歌語として使われることの多かつたこのことばは、「髪」ということばの持つイメージと相俟つて、女性の姿を連想させるものとしてあつた。一例として『大和物語』を引いておく。

むかし、ならの帝に仕うまつるうねべありけり。顔かたちいみじう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひ

けれど、あはざりけり。そのあはぬ心は、帝をかぎりなくめでたきものになむ思ひたてまつりける。帝召してけり。さてのち、またも召さざりければ、かぎりなく心憂しと、思ひけり。(中略)なほ世に経まじき心地しければ、夜、みそかにいでて、猿沢の池に身を投げてけり。(中略)池のほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌よませたまふ。かきのもとの人麻呂、

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき

とよめる時に、……

(一五〇段 三九七頁)

『拾遺和歌集』に入集、『枕草子』にも引かれるこの人麻呂の歌は、平安の人々には周知のものであったはずである。ここに詠まれる「ねくたれ髪」は、猿沢の池に身を投げた采女の髪を、水面に浮かぶ水草に重ねたものであるが、「ねくたれ」・「髪」双方の持つ官能的なイメージによって、説話化の過程で、女が帝と一夜限りの契りを結ぶという背景が生み出されたのだと推測される。つまり、「寝くたれ」ということばには、「源氏物語」を待つまでもなく、逢瀬を連想させる素地があつたのだということになる。

だとすれば、「源氏物語」の達成とは、そのような歌語「寝くたれ髪」のイメージを散文世界に取り込んだこと、美しさを表すものとして定着させたこと、その上で、女性の姿を描くことの多かつたこのことばから、女性性の象徴でもある

「髪」を取り除き、男性の姿を描くものへと転化させたことにあると理解できる。

そして、さらに重要なことは、「寝くたれ」が男君の姿を表すものとなったことによって、それは、第三者の視線にもさらされるものとなったことである。先に挙げたFにおいて、夕霧の「ねくたれの御朝顔」を見るのは、内大臣家の人々である。雲居雁との長い隔ての年月を経て、今、ようやく結ばれた夕霧の「寝くたれ」の姿は、内大臣家の人々の視線を集めることで、公的な祝性を持つものとなる。G・Hにおいて、光源氏の「御寝くたれのさま」、匂宮の「寝くたれの御容貌」を見るのは、逢瀬の相手ではなく、自宅で待つ紫の上、中の君である。それは、無言のうちに事態のすべてを語るものとなり、女君の苦悩を生むこととなる。すなわち、「源氏物語」における「寝くたれ」は、先夜の逢瀬の内実、その濃密さをも暗示させるものとしてあるのであって、そこに第三者の視線を注がせることによって、単なる官能性の発露に留まらず、物語のより深い局面までも導き出す役割を果たしているのである。それは、本質的に他者の視線を拒む女君の「寝くたれ」の姿を通しては、決して到達しえない表現世界であった。『源氏物語』の優れた独創性を、ここにも認めることができるだろう。

しかしながら、その達成は、後代の物語に引き継がれたとは言いがたい。男君の「寝くたれ」の姿は、『夜の寝覚』・『浜

松中納言物語』には見出せるが、中世王朝物語に至っては、『とりかへばや』にわずか一例あるのみである。先に見た⑦～⑩の用例の通り、「寝くたれ」の姿は、もっぱら女君の姿として描かれるようになっていくのだが、その変化を最も顕著に示すと考えられる例を見てみたい。『いはでしのぶ』の例である。

御髪をかきやりつつ見奉り給へば、まだ寝くたれのつくるふところなき御顔の、雪よりもけに、透き通りたるまで白く、美しなど言ふもおろかなるに、御まみのわたりのうち濡れて、薄色の御衣の、少しなよかなる御袖の上も、とどころかへりて見ゆるに、さればよといとど心まどひのみせられつつ、…… (巻二 二二二頁)

ここに描かれているのは、内大臣の妻である一品の宮(女二の宮)の「寝くたれ」の姿である。ここでも、「美しなど言ふもおろかなる」という定型的な表現でその絶対的な美しさが強調されており、先に見た他の中世王朝物語の用例と等しく扱ってよいものと思われるのだが、今、問題としたいのは、この場面の状況設定である。実は、この一品の宮の姿は、内大臣との逢瀬の後のものではない。内大臣が、別の女君(伏見の姫君)と過ごした翌朝、「心の鬼添ひて」(二二二頁)という心境で帰宅し、対面した折の姿なのである。

この状況自体は、先に見た『源氏物語』G・Hと、非常に近いものであることは言うまでもない。(場面取り)と呼ん

でも差し支えないものであろう。にも関わらず、ここで「寝くたれ」ているのは、男君ではなく、女君なのである。『源氏物語』の当該箇所を、主語を取り違えて模倣すればこのようになるのではないかと疑いたくなるような例である。実際、一品の宮は、先夜は「御目も合はぬ」(二二〇頁)という状態だったのであって、一睡もしていない様子を「寝くたれ」と表すのは、語義的にもおかしい。にも関わらず、『いはでしのぶ』がここに「寝くたれ」の女君の姿を描くのは、逢瀬の場面の後に「寝くたれ」の姿の女君の美しさが確認されるという物語展開が定型となっていたか、「寝くたれ」の美しさが物語のヒロインに不可欠なものとして意識されていたか、いずれにせよ、女君の「寝くたれ」の姿の強い定着度を推測させるものとなっているのである。ここに、『源氏物語』からの断絶とも呼ぶべき、大きな距離を確認できるだろう。では、いったい、中世王朝物語の「寝くたれ」の女君の姿は、何を源泉とするものなのであろうか。やはりここでも、『狭衣物語』を見ておきたい。

皇太后宮の御形見の色にやつれさせたまへるころにて、このごろの枯野の色したる御衣どもの、濃く薄くすぎすぎなるに、同じ色の擣ちたる、われもかうの織物の重なりたるなど、こと人の着たらばものすさまじかりぬべきを、春の花、秋の紅葉よりも、なかなかなまめかしう見ゆるは、人がらなめりかし。わざとひきもつくるはせた

まはぬ寝くたれの御髪のかほれかかりたる肩のわたりなど、様ことに見えさせたまふ。人々の遊びそぼるるを御覧じて、笑ひなどせさせたまへる愛敬など、曇りなき雪の光にもてはやされたまひて、まことにあたりまで光るやうに見えさせたまふ。

(卷二 二〇〇頁)

雪の朝、女房たちが「雪まろばし」をするのを見る源氏の宮を、狭衣大将が垣間見する場面である。ここに描かれているのは、まさに、物語のヒロインの「寝くたれ」の姿である。この場面は、後に、狭衣大将に「齋院の枯野襲奉りし御寝くたれ姿」(卷三 一〇二頁)として回想されており、その姿が狭衣大将の脳裏に焼き付いた最大の要因として「寝くたれ」があったことが確認できる。ここに、散文作品における、女君の「寝くたれ」の姿の嚆矢がある。

しかしながら、この源氏の宮の姿を、中世王朝物語における女君の「寝くたれ」の姿の、直接的な始発点と位置づけることには慎重でありたい。なぜならば、ここには、中世王朝物語の「寝くたれ」の女君にあった重要な要素が抜け落ちてゐるからである。それは、この源氏の宮の「寝くたれ」は、逢瀬の後のものではないという点である。

先にも述べた通り、本来、女君の「寝くたれ」の姿は、第三者に見られるべきものではなかった。それを見ることのできるのは、逢瀬の相手の男君だけである。源氏の宮の「寝くたれ」の姿が、狭衣大将の目に鮮烈であつたのは、それが、

契ることの許されない相手のものであつたからに他ならない。本来見ること叶わぬその姿を目にすることができたからこそ感動と衝撃がそこにはあり、一種の禁忌性までもが漂うのである。この場面において、源氏の宮の「寝くたれ」は、逢瀬の後の姿ではない点にこそ、重い意味があると言えよう。

このような『狭衣物語』の表現は、『源氏物語』に見られた男君の「寝くたれ」を変容させたものというよりはむしろ、基底となる歌語「寝くたれ髪」のイメージを、『源氏物語』とは別の角度から昇華させたものと捉えるべきであろう。逢瀬と女性をイメージさせるそのことばから、『源氏物語』は女性という要素を脱落させたが、『狭衣物語』は逢瀬という要素を完全に捨てるのではなく、潜伏させる形で利用している。そして、第三者の視線という要素を入れる点は『源氏物語』に拠りつつも、そこに、禁忌性という新たな意味を付与することに成功しているのである。それは疑いなく、『狭衣物語』独自の達成であつて、ここに、これまでに見てきた中世王朝物語の例を並べ見るとき、その違いは、あまりに大きい。¹⁴⁾

中世王朝物語に描かれる、逢瀬の後の「寝くたれ」の女君の姿は、『源氏物語』からも、『狭衣物語』からも、遠く隔たつてゐる。もちろん、『源氏物語』がなければ、逢瀬の後の「寝くたれ」の姿が定着することはなかつたであろうし、『狭衣物語』がなければ、ヒロインの「寝くたれ」が描かれること

はなかつたかもしれない。好意的に考えれば、中世王朝物語は、両者の達成を、ある一面、ともに引き継いだと言えるかもしれないが、しかし、逢瀬の相手の男君に見られるのみのヒロインの「寝くたれ」の姿は、当然の姿を平板に描いたものとしか言いようがないのではないか。ヒロインの美しさを強調するためのことばとしてのみある「寝くたれ」は、中世王朝物語において、なかば慣用表現化していると言ってもよいのかもしれない。

そして、それは、結局のところ、歌語「寝くたれ髪」への回帰であった。表現史における多くの達成を通過した末に、中世王朝物語が辿り着いたのは、その振り出しと同じ地点であったのである。『源氏物語』・『狭衣物語』の達成をまったく理解していないゆえのものなのか、あるいは、その達成をさらに超克しようとしたがために、裏の裏が表になってしまったものなのか、それは、個々の作品の分析に委ねるしかないが、結果として、多くの作品が同じ方向性を示していることは、中世王朝物語が何を目指していたのかを浮かび上がらせる。それは、すなわち、原点回帰である。

複雑に多層化した「寝くたれ」という表現は、今、女性の生まれながらの美しさを表して、その淵源へと帰着する。そして、そのことばが付されるヒロインにもまた、定型的な美しさが求められているのであって、あるいは、そこに、個性など必要なかつたのかもしれない。中世王朝物語が描きた

かつたのは、独創的な「わららか」なヒロインの姿でもなく、永遠に手が届かない「寝くたれ」のヒロインの姿でもなく、逢瀬の相手の目にもみ映る、始源的な女性の美しさであったのだ。

おわりに

以上、「わららか」・「寝くたれ」ということばを辿り見ることによって、それぞれの表現史と、『源氏物語』からの距離を考察してきた。

中世王朝物語の女性像をめぐることは、その行動力や意志の強さという側面に言及されることが少なくない。しかし、本稿の考察結果に照らし合わせてみれば、そのような新しい女性像は、端役により強く認められるものであって、ヒロインには、源泉に遡った、典型的な「物語の姫君」像が求められているように思われる。それを、『源氏物語』からの表現力の後退と捉えるのは容易いが、むしろ、中世王朝物語の目指すものが、『源氏物語』の目指すものとは異なっているがために、たしかに稚拙ではあるものの、意図的な取捨選択が行われているのだと考えたい。その目指すものとは、『源氏物語』が既存の表現世界を常に更新して、その独創性の中に新たな物語を構築していったのとはまったく逆の、始源へ始源へと向かう、物語の「核」とでも言うべきものを求めることにあつたのではないか。その実現のためには、『源氏物語』の達成

したものが、時に、容赦なく切り捨てられることもあるのであって、中世王朝物語の本質は、『源氏物語』の表現をそのまま再生することのみあるのではないことに気づかされるのである。それは、ある意味、『源氏物語』の影響の克服なのかもしれない。

言うまでもなく、本稿は、中世王朝物語の特徴の一部を、限られた範囲で切り取ったに過ぎない。別の角度から眺めれば、そこには新たな意図が浮かび上がるであろう。今後の課題として、考察をつづけていきたい。

注

(1) 拙稿『源氏物語』と中世王朝物語、その変容と断絶(『語文』87 H 18・12)

(2) 米野正史「中古文学における接尾語「やか」「らか」——『源氏物語』玉鬘に用いられた「そびやか・なびやか・さはらか・わららか」について——」(『国語研究』(國學院大学) 42 S 54・3)

(3) D・Eの用例も、玉鬘と無関係ではない。Dは、鬚黒大將が「わららか」ではないために、玉鬘が馴染まない状況を表すくんだりであり、Eは、玉鬘主催の光源氏の四十賀において、玉鬘の実父である太政大臣が「わららか」な音で琴を弾く場面である。いずれも、玉鬘の「わららか」さが前提となって使用されている用例であると理解できる。なお、中世王朝物語において、Eのように、楽器の音に「わららか」が用いられる例は、次の『風に紅葉』の一例のみである。

また、傍らに箏の琴、そのいろとなきまで掻き重ね、わらら

かに弾きなして、いとふくらかに、鼻ひき入りたる心地して、山吹のにはひに、桜の小桂着給へるは、麗景殿なるべし。いまぞ盛りと心地よげなるもむつかしく、わが同胞の女御と御覧じくらぶらん。(上二二頁)

(4) 河添房江「六条院王権の聖性の維持をめぐる」(『源氏物語表現史 喩と王権の位相』翰林書房 H10)

(5) 佐藤雅子「わららか」な女——源氏物語「玉鬘」論——(『解釈』29・4 S 58・4)

(6) 中世王朝物語は、一貫した主題が見出しにくいものが多く、主人公が途中で交代することもあるため、「ヒロイン」ということばを使うことには問題があるかもしれないが、本稿では、便宜上、「物語の中心的な話題を担う男君から最も愛される女君」という定義で使っておく。

(7) 他には、飛鳥井姫君腹の姫君に、次のように使われている。蘇芳の織物の細長着て、髪は肩のほどよりも過ぎて、若宮の御ほどなるや、それならむ、と見ゆるに、もの言ひてうち笑みなどしたる口つきの愛敬、いとかをりうつくしけれど、若宮の御気高さは劣りたるまみの、いとわららかにてらうたげなるは、「ただかの夜な夜な月の影に変はらざりけり」と見るに、涙もこぼれて、細き穴よりいと見えずなりぬ。(卷二 一〇四頁)

女二の宮腹の若宮と比較して、「御気高さは劣りたるまみ」が「わららか」とされる点、『源氏物語』の「わららか」の語義を忠実に引き継いだものと理解できる。

(8) ただし、「昔の衣」の東院の上の性格は、「けぢかきさまにはものし給はず」(春 一七頁)と語られており、「わららか」とは

正反対のものとなっている。そのため、洞院の上や按察の上とは異なり、完全な悪役となってしまう。「わららか」を付された姫君も、人違えによって盗み出された後、「世とともに思し嘆かしきけにや」（冬 二〇四頁）と死去してしまうのであって、「わららか」な性格付けが何の意味もなしていない。『苔の衣』の「わららか」は、有機的に働いているとは言いがたい。

(9) もう一例、気になる用例がある。

故大臣、さだ過ぎたまへりしかど、いとこちごちしく、わららかにやさしかりし人の、いかでもこの人の心を靡かさむと心を尽くしたりけむ気色、いかばかりかはをかしかりけむ、……（巻五 四八八頁）

亡くなった老閑白の性格を「わららか」とするものである。これは、表現史上孤立した、男君の性格を象徴する例として注目される。あるいは、先に見た『源氏物語』Dの用例で、鬚黒大将が「わららかなる気もなき人」とされていたのを、意識的に反転させたものか。

(10) 中世王朝物語の端役が、行動力を持ち、个性的に描き分けられていることは、既に指摘がある（豊島秀範「物語世界の変貌——擡頭する脇役たち——」『物語史研究』おうふう H6）が、「わららか」は、出自の低い女房クラスの女性には使われないことから、ある程度の血筋の良さを表すことばでもあることが見て取れる。

(11) 山口正代「夕霧の「寝くたれ」の顔」『古代中世国文学』22 H18・6

(12) 用例は以下の通り。

・『夜の寝覚』

果て果ては、ものも言はれず、背きたまひぬるを、「中略」あが君、かくなおほし背きそ」と、引き替へつつ、慰めこしらへて、からくして、さすがにうち忍びて歩み出でたまふ。御ねくたれの御にほひ、いと見るかひあり。（巻四 三三二頁）

・『浜松中納言物語』

ほのぼのと明けゆく空のけしき、春秋の霞、霧よりも劣らず、浅緑なる梢の、何となくけぶりわたりたるほどをながめて、端近う柱に寄りあておこなひ給ふに、思ひもかけず、えんなるねくたれの姿なまめかしく、御簾うち上げて、簀子の長押におしかりてみ給ひぬれば、……（巻三 二四三頁）

『夜の寝覚』は、寝覚の上との逢瀬の後の内大臣の姿、『浜松中納言物語』は、大式の娘との逢瀬の後に、尼姫君のもとを訪れた中納言の姿を、それぞれ描くものである。いずれも、『源氏物語』からの影響を感じさせるものである。

(13) ただし、その唯一の例も、『源氏物語』の詞章の忠実な模倣箇所にはすぎない。

今ぞ、大将殿の御方より人参りて、「酔のまぎれにいと乱りがはしきあやまりも、参りて聞こゆべきを、乱り心地ためらひ侍るほど、渡らせ給ひなんや」と聞こえ給へば、参り給へる。寝くたれの御朝顔ども見るかひあり。（巻四 三〇六頁）
吉野の妹君と結婚した権中納言が、次の日、今大将のもとを訪れた場面である。「御朝顔ども」という複数形になっているのは、今大将もまた、昨晩は吉野の大君とともに過ごしていたため。お互いに「寝くたれの御朝顔」を見合っているという点にのみ新しさがあるか。

(14) 中世王朝物語の中で、『狭衣物語』の達成を引き継いでいると

見なされるものが二例のみある。まず、『海人の刈藻』の例。

「御前にも少し出でさせ給ひて、御覽ぜよ」と聞こゆるに、
中納言、節穴のありし思し出でて覗き給へば、いまだ寝くた
れの御さまながら、柳・桜の御衣、しどけなげに着なして、
脇息に押しかかりて、眺め出だし給へるまみ・口つきよりは
じめ、光り輝くやうにけだかうつつくしげに、らうたさ言は
んかたなし。
(巻一 八八頁)

新中納言が、清涼殿の桜を眺める藤壺女御の姿を垣間見する場面である。思いを抱きながらも契ることの許されない相手の「寝くたれ」の姿を見るときという点において、『狭衣物語』の「寝くたれ」と同じ使われ方がなされていることが認められる。もう一例は、『在明の別』から。

いささかひきつくるふ所もなき寝くたれの御かたち、くまな
う晴れたる空の光に、言ふよしなく見えさせ給ふにも、例の
胸うち騒ぎて、さまざま思ひつづくることぞ多かる。
(巻一 二七五頁)

女院(前の女大將)が風邪を引いていると聞き、左大臣が駆けつ
ける場面である。これも、男君がひそかに慕う相手の纏わない姿
を描いている点で、『狭衣物語』との共通点が指摘できる。以上
二例からは、『狭衣物語』理解の深さがうかがわれるが、これま
で見てきた通り、このような使われ方は、中世王朝物語の中にあつ
ては異例である。

(15) 実は、その隔たりを埋めることのできる例がある。『在明の別』
の例である。

ほのぼのと明けゆく月かげに、限りなく思ひ乱れて、立ち出
で給へる寝くたれの姿は、世の常の錦の帳の中に、九尺の髪

のうちやられたらんには過ぎて、あてにめでたくぞ御覽じな
さるる。
(巻一 三四三頁)

女大將が、その男装を見破られ、帝と衝撃の一夜を過ごした翌朝、
思い乱れたまま帰途につく場面である。(ここに用いられている「寝
くたれ」は、表層的には、逢瀬の後の男君の姿を描きつつも、そ
の実相は、逢瀬の後の女君の姿を描くものとなっており、注目に
値する。『源氏物語』の達成を引き継ぎつつも、中世王朝物語の
指向性を表し、非常に興味深い例であると言へるのだが、しか
し、これも、先に「わららか」で見た「とりかへばや」と同じく、
男装の女君という設定のもとで描かれた場面であり、表現史上の
屈折点と位置づけるには、特異すぎると言わざるをえない。ただ
し、『在明の別』は、前掲注(14)の例も併せ、『源氏物語』・『狭
衣物語』の達成を見事に作品内に生かしており、「寝くたれ」の
表現史において、『源氏物語』・『狭衣物語』にかなり近い位置に
ある作品であることは確かである。

※用例調査を行った作品と使用したテキストは以下の通り。

- ・『源氏物語』……日本古典文学全集(小学館)
- ・『狭衣物語』……新潮日本古典集成(新潮社)
- ・『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『松浦宮物語』……新編日本古
典文学全集(小学館)
- ・『堤中納言物語』『住吉物語』……新日本古典文学大系(岩波書
店)

- ・『あきざり』『浅茅が露』『海人の刈藻』『風につれなき』『風に
紅葉』『苔の衣』『木幡の時雨』『恋路ゆかしき大將』『小夜衣』
『雫に濁る』『しのびね』『しら露』『とりかへばや』『松陰中納

言物語』『むぐら』『山路の露』『夜寝覚物語』『我が身にたどる
姫君』……中世王朝物語全集（笠間書院）

・『在明の別』『石清水物語』『いはでしのぶ』『雲隠六帖』『兵部
卿物語』『八重葎』『別本八重葎』『夢の通ひ路物語』……鎌倉
時代物語集成（笠間書院）

本文の引用も、各テキストに拠る。ただし、読解の便宜のために
表記を改めたところがある。その他の作品の引用は以下の通り。

・『大和物語』……日本古典文学全集（小学館）
・『枕草子』……角川ソフィア文庫（角川書店）

（ふじい・ゆきこ） 清泉女子大学専任講師